学力向上フォーラム概要

平成22年２月５日（金）
県 立 教 育 研 究 所

1　平成21年度全国学力・学習状況調査の結果分析と課題解決への道筋

県教育委員会事務局学校教育課係長　　吉村　茂

2　実践発表

「学ぶ意欲とわかる楽しさを目指した取組」
　平群町立平群西小学校　校長　池田　英二
「学校ぐるみで学ぶ意欲を高める取組」
　天理市立北中学校　　教諭　冨山　敦史
「理数科の特色を生かした取組」
　県立青翔高等学校　　教諭　大西　修二

3　シンポジウム

学びへの意欲を高める　－授業の在り方をめぐって－

コーディネーター	奈良教育大学	教授	重松　敬一
シンポジスト	奈良教育大学	教授	棚橋　尚子
	奈良教育大学	教授	小柳和喜雄
	県教育委員会事務局学校教育課	課長	吉田育弘
実践発表校代表	平群町立平群西小学校	校長	池田英二
	天理市立北中学校	教諭	冨山敦史
	県立青翔高等学校	教諭	大西修二

シンポジウム概要

重松

すでに学力向上にかかわって県教委から、そして実践校からの報告があったが、それらも踏まえながらシンポジウムを始めたい。今回のテーマは「学ぶ心を熱くする」であるが、まさに子どもの心を熱くするだけではなく、先生も学校もそれを支える県の取組、あるいは市町村、または保護者の心というものもいかに熱くするか、そのことによって学習意欲をいかに喚起するか、そんなことについて少しの時間であるが、結果を踏まえた課題、改善に向けた方策を明らかにするため、それぞれの立場での取組を交流していきたい。しかし、何よりも大切なのは、終わったとき、「現実は大変なのだ」というのではなく、「よし明日から元気に頑張ろう」という心で終わることができればと思っている。また、フロアの皆さまからには忌憚のない意見をいただきたいと思う。

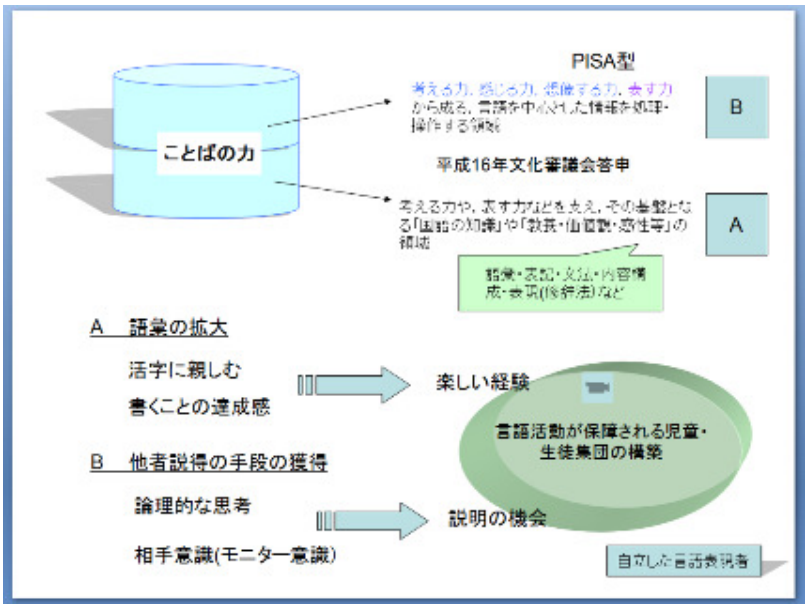
早速ではあるが、シンポジストの方々からお話をうかがいたい。その後、フロアの皆さまとの交流、実践校の発表に対する御意見も含めて交流していきたいと思う。その後、シンポジストの最終コメントをいただいてお開きとしたい。

では、最初に棚橋先生からお願いしたい。

棚橋

私自身も、もとは中学校も小学校も経験したことのある実践者の一員である。私が中学校で教員としての生活をスタートしたころ、校内暴力の嵐が吹き荒れていた時代であった。そのとき、生徒指導に一生懸命になっていたが、当時の校長先生から「生徒指導も確かに大事だが、教科指導を大事にできる教員こそ生徒指導のできる教員である。」と言われた。「授業が分かる、できるようになったと感じさせることができれば、自然に子どもたちもついてくるものだ。」ということを力説され、それ以来国語科教育に取り組んで今の立場にある、ということになる。

今日は「自立した言語表現者の育成のために」というタイトルを付けた。これは、先日見たテレビ番組の内容が関連している。その番組ではこのようなことを言っていた。今日は子どものことを話題にしているが、日本人はおとなも人に対して自分の考えていることを説明することは苦手である、というのである。例えば、「日本のよいところを説明してください。」と街行く人々に投げかけた時、項目で考えることはできるが、それを続けてひとまとまりの表現をすることは難しいと言って敬遠されることが見られたという。ちょうどそれは、いま私たちが身に付けさせなければならない学力であるので、お話を進めていきたいと思っている。



この絵を見てもらうと「ことばの力」というものが最初に来ているが、これについてはいろいろな言い方をしている。結局は日本語の運用能力であると考

えてもらっていい。この「ことばの力」は巷でいろいろ取り上げられている。私たちがいま育てなければいけない「ことばの力」というものは、もともとは平成 16 年の文化審議会答申にでてきた「国語力」と言われた力である。簡単に言うと、ことばの力は２層に分かれていて、下の層は、考える力や表す力、つまり上の層の力を支え、その基盤となる国語の知識、価値観、感性の領域であるとしている。

それからその上にあるのは、ここを基盤として考える力、感じる力、想像する力、表す力からなる言語を中核とした情報を処理・操作する領域であると言っている。つまりこれはＰＩＳＡ型といわれる読解力であり、自分で考えて社会に貢献できるような、そのような力にかかわることで全国学力・学習状況調査ではＢの領域に当たる。それを簡単に模式的に表してみた。

ＡとＢのだいたいどのようなところを中心的に取り組んでいけばよいのか、ということをここには書いている。まず、何といっても私たちが言葉を操るようになるためには操ることのできるだけの語彙をもっていなければいけない。学習指導要領には過去に音声言語の重視というものがあって、現在の学習指導要領でも「話す・聞く」にシフトした学習がなされていると思うが、それは非常に大事なことで、日本人が音声表現が苦手であるということから、そのことに気付いたのである。

話し言葉だけでは語彙の力は育っていかない。話すときにあまり難しい言葉ばかりを使っては、聞く人は何を言っているのか分からなくなるし、場の雰囲気や表情などからも伝わるものである。言葉の量は音声言語の指導をしているだけでは育たないということになる。もちろん大事ではあるが、語彙という点から考えると不十分ではないかということができる。

そういう意味では、活字に親しむ指導をこれから考えていかなければならない。活字に親しんで文字に触れる、言葉に触れることが必要である。ただし触れているだけでは、理解語彙にはなっても使用語彙にはならないので、実際に使われるようにしなくてはならない。そのためには書くことを充実していかなくてはいけないが、非常に難しいところである。一人一人の子どもに向かい合っていくことが求められることであり、負担量という問題からも大変だと思うが、ここを何とか工夫することで、子どもに書くことの達成感を生み出すような授業を展開していければよいと考える。そして大切なのは、楽しんでいるということである。それは、知的な楽しさを共有することが楽しいのであるという意識を付けていくということである。このことについては、後ほどお話をしたい。

Ｂのところで考えると、Ｂで大事なことは何かというと、他者説得の手段の獲得であるということである。自分が言うことに対して相手が共感したり、疑問をさしはさんだりということがあるが、コミュニケーションの一端となる説得の手段を獲得させなければならない。これは子どもに論理的な思考ができるようにしなくてはいけないということである。それをもとに相手意識、作文では他者意識が重要視されているが、自分が発言したことで相手はどのように思うだろうか、感じるだろうかと自己をモニターしていく能力を育てなくてはならない。同じことを言ってもこの子の言うことなら素直に聞けるなと思われる場合と、何言っているんだと思われる場合がある。これまで場当たり的に指導されていることが多かったと思うが、組織的に指導し、どのような表現が相手を説得することができるのかということを育てていかなければいけない。そのためには、説明の機会を取り入れるような授業構成をしていくことが必要だと思う。

一番言いたいことは、こういうことを保障していくのは、言語活動が保障される児童生徒集団の構築、つまり学級や学級の一部のグループがどういう状況であるのか、また教員が子どもに受容的であるのか親しまれているのかどうかということがカギになってくるであろうと思う。授業を変えるということが本題であるが、ひとまずここで終わることにする。

重松

国語のことを中心に言われたが、他の教科にも言うことができる。とくに、全国学力・学習状況調査における算数・数学の結果で、無解答率が高いということや説明する問題について正答率が低いというのは、相手をあまり意識できていないことが関連していると言われている。

つぎに小柳先生から学校の組織といった観点からお話いただきたいと思う。

小柳

今までの発表の中から学びへの意欲について考えたいと思う。３本の発表の中で共通項を考えてみた。学びの意欲を高めて行くためには、四つぐらいのものがあったと思う。

まずは面白そうと思わせること。動機付けのことで英語でアテンション（attention）のこととして「Ａ」。面白そうと思わせることで学びの意欲を高めるやり方がある。次に、理解し甲斐がありそうということ。これは、自分がしていることが将来にかかわりそうだとか日常生活にかかわりそうだとか、明日の私にかかわりそうだということと関連性を感じられるレリバンス（relevance）という意味での「Ｒ」。三つめができそうだと思えること。ちょっと手を伸ばしてジャンプすれば手が届きそうだ、先生のアシストがあればできそうだということ。できて自信につながる、コンフィデンス（confidence）の「Ｃ」。そして最後に一番のポイントはやってよかったなと感じられるかどうか、これが学びの意欲につながると思う。サティスファクション（satisfaction）の「Ｓ」。これらをＡＲＣＳと表すことにする。

今日の話の中でポイントとして出てきたのは、結局は達成感の話だったと思う。最後のＳにかかわって、やってよかったなということである。終わった後に、次につながる満足感、達成感をいかに味わわせるかということが学習意欲を高めていくキーになると思う。それには仕掛けが必要である。やってよかったなと思わせるためには、面白そうと思わせる従来の取組が必要であるし、今やっていることが次につながるということ、自分がしていることが将来につながるという、理解しがいがありそうだと感じる仕掛けも必要である。さらに、できそうだと思わせる仕掛けが必要であり、とりわけやってよかったなと思わせる仕掛けが必要だと思う。

それには、子どもに対して、先生に対して、保護者に対して、三つの働きかけがあるということが分かった。３校の取組を見てみると　子どもたちに対して取り組もうとするときには必ずプリントのような道具があった。また、どうやってしていくのか、手続きを示すことがあった。何かの道具を作ってするという共通項があった。

次に、ルールである。何かをするにしてもルールが決まっていないといけないし、いつまでに、どのようにやるのかということがしっかり決まっていることが、子どもに対しても教材に対しても友達に対しても必要であると思う。平群西小学校の発表の中にもあったように思う。あとは、仕掛けとして、活動の組み立て、どの順番が大切かということだと思う。

後は、評価である。ほめるというのはもちろんであるが、揺さぶるというものもある。さらに追い込むということ、もっと上の課題に追いこむということもあると思う。３校とも振り返る機会を保障していると思う。学年が上がるに従って追い込むということがあった。

次に学校や教員同士では、みんなにビジョンの共有があったと思う。この方法でいくぞという方針がないといけない。手立てについてはある程度その場に応じて変えていってよい。ただ、方針がない手立ては揺れていく可能性がある。逆に方針だけで手立てがない場合は、取組がスローガンだけで先に進まないので、ビジョンの共有がいると思う。あとはチームワークをいかに高めていくかというこ

とである。チームワークを保障するには運営組織がないとできない。運営組織の質を高めていくには、相互評価が必要である。互いにやっていることを認め合ったり、説明し合ったり、保護者や子どもにアピールしたりする、そういったことを考えていく必要がある。最後は教員の士気を高めること、そういうモラールを高めていくことが学力向上の中でも大切だと思う。

最後に家庭や保護者に対してであるが、平群西小学校でかなり苦労されていることが分かった。作成した手引を見せてもらったが、家庭にどんなことをしてほしいのかということを明確にすることで、家庭の役割が明確になっている。そのほか、例えば子どもの評価にかかわって、子どものこんな姿が見えたらＯＫだということを示す、どんな姿が見えたらその子が伸びていて、自分の取組がよかったと感じられるのか、手引の中に示したりチェック項目があったりして、保護者の自己評価ができるようなことがあればよいと思う。そして相互に認め合う機会であるとか、学校便りに紹介したりして評価できるということが大切であると思う。そして参加の機会として家庭の方々が学校運営にどのように参画していくのか、ルールや役割がそのときに生まれ、さらにその点を伝えることが次に生まれてくるが、こういったことが裏側にある仕掛けではないかと感じた。

重松

子どもたちの学ぶ意欲について具体的な形で学校だけではなくて、地域の皆さんにも共通に意識される、そういったことについて全体的な構造をおまとめいただいた。では最後に県の取組も含めてお願いしたい。

吉田

学校教育課は教育行政の担当であるが、場合によっては行政の立場を忘れて高等学校の数学の教員としての思いが入るかもしれないが、お許しいただきたい。

昨日、御所市の教育長がおいでになり、市として今年度から算数大会を立ち上げたことを話された。わたしはその話を聞いて悔しい思いをした。県として立ち上げたいと思っていたことを先にされたからである。来年度は、もっと充実させていきたい、青翔高校を使ってしたい、高校生も使って勉強しながら広めていきたい、とも言われた。採点をさせるようであるが、高校生が子どもたちの目線で採点をし、かかわっていくことで学んでいくであろうと非常に熱く語っておられた。自分も数学の教員であるので、その思いは十分伝わったが、教育長の思いが子どもや先生方に伝わっていけばよいと思っている。

わたしは、ここで学力の向上のカギは授業にあるということと、家庭との連携、取組の啓発が必要であるということについて提案させていただきたいと思う。

学力低下の議論はあまり意味のないことだと思っている。60 年前の学力と今求められる学力は違う。知識の量は時代に応じて変化するものだと思う。ただ、学習意欲の低下については非常に深刻な問題だと感じている。

神奈川県では、公立の中学校３年生を対象に 1965 年から５年おきにずっと調査をしておられる。「もっとたくさん勉強をしたいと思いますか。」という簡単な質問調査である。1965 年の中学校３年生と言えば、いま 60 歳ぐらいであるが、その当時もっと勉強したいと答えた生徒は約 65％いた。それが徐々に下がっていった。2005 年には約 24％になり、2000 年に下げ止まってわずかに上昇傾向にあると言える。逆にもう勉強したくないという生徒は、4.6％から 22％に増えているという経年での結果が出ている。勉強したくないという理由は、勉強が嫌い、つまらない、面倒くさいなど、そうい

ったものが約半数ある。それから精神的に勉強がつらい、体力的にも耐えられない。そういった生徒が約 13%。さらに将来に役に立たない、意味がないという生徒も約 13%などとなっている。こういった調査の結果が出ていて、やはり授業を通して学力向上を目指していくための原点となるのは、学習意欲を喚起させる、向上させるということが一番大事であろうと思う。これまでにも、意欲の喚起のために授業を面白くする、授業を充実して工夫するということが必要だと言われてきた。

わたしも小学生のとき学力テストで表彰されて学習意欲を喚起されたという経験がある。ただ、この二つだけでよいのかということも感じている。これだけでは無理ではないかと思う。いま、活用する力ということも言われているが、やっている勉強がどのように役に立つのか、学習と身近なものを結び付けるとか、面白い授業から共に学ぶ楽しさを共有できるような授業、それは子ども同士であったり、子どもと保護者であったり、先生と子どもであったり、ともに学ぶことで学習意欲全体の底上げになるのではないかという思いを強くもっている。

それから家庭との連携、啓発については大変なことである。御承知のように、学業成績と生活環境とには相関があるのではないかと言われている。ただ、生活を整えたら学力が上がるというような簡単なものではない。しかし生活が乱れたら学業成績の低下につながっていくと考えることはできる。ところが生活リズムを改善していくのはなかなか難しい。仮に、子どもの夜更かしを改善していこうとすると県民運動のようなものも必要になってくると思う。例えば東京都では、子どもの夜更かしを改善することについては、なかなかその壁を突破できなかったようであるが、最後に壁を突破できたのは保育士さんとの母親の一対一の懇談によると言う。これは足立区の例である。なぜ夜更かしをさせるのか、自分の子どものころはどうであったのか、そういった話をしながら、夜更かしをさせることが子どもに与える影響に気付かせた。非常に地道な作業であるが、こういった取組についても教育委員会としてどのようなことをしようとしているのか、このあと報告させていただきたいと思う。

重松

具体的にはどのようにしているのかということをこの後お話していただけたらと思う。３人の方からお話をいただいた。この後は、フロアの皆さんと交流をしたい。発表校の皆さんにも御質問をいただけたらと思う。

フロアから（小学校）

子どもたちの価値観が多様化している。学習の中身についても個人差が広がっていると近年感じる。一人の先生が多くの児童を相手にがんばっている。塾に通う子には簡単すぎる内容があるし、家庭によって目指す方向も違う。子どもの目指す目標も違うと思う。個人差が広がっているように思う。それに対してどのように取り組めばよいのか。助言をいただきたい。

平群西小学校

確かに子どもたちの価値観は広がっている。指導は難しいと思う。本校では下のレベルで合わせて考えていきたい。家庭環境がいろいろあってしんどい面はあるが、保護者との連携も図っていきたいと思う。さらに保護者との連携のほかに中学校や保育園との連携をとっていることも多い。この間もしんどい状況にある子どもの妹が保育園に通っていることがあって、保育園に出向いて話を聞いた。小学校では保護者と直接話す機会は少ないが、保育園では送り迎えなどで接する機会が多いので連携を図って情報を得るようにしている。

重松

子どもたちの心の声を聞くということをいかに確保するかということ、保護者とどのように接するかということでお取り組みいただいているようである。

北中学校

価値観がいかに多様化したとしても変えてはならないことがあると思う。そのことを教員同士や地域に伝えていくことが大切ではないかと思う。そのときに個々の生徒がおかれている社会的な状況、経済的な状況まで含めて把握できているかどうかが問われてくると思う。連携の問題についても保育園、幼稚園、小学校、あるいは高校に至るまでいろいろなところまで関係を築いていく必要がある。親にも本音がある。そんなところまでつっこんでいく必要がある。そうすれば、価値観が授業の中で問題として湧き上がってくることは少ないのではないかと思う。

重松

学校のほうから積極的に働きかけなければということで取り組んでいただいている。

実はここまで報告はなかったが、今年は初めて奈良県教育委員会がワークショップと言って、実際に街頭に出て奈良県の子どもの学力の状況をお伝えしたり、こういった形で子どもの学びをサポートしていただきたいなどを訴えたりした。実際に皆さんの声を聞いて、情報を集めてＰＲしていこうとされた。そういったことについてもあとでお話しいただきたいと思う。

ところで、小柳先生にうかがいたいが、先ほど学びの意欲の四つの観点を示された。学びの意欲は子どもによってちがうのだろうか。よかったと思う子どもたちの思い方は違うのだろうか。個人差についてうかがいたい。

小柳

例えば達成感について。子どもたちが何にどう達成感を感じるかというと、課題にかかわって達成感を感じる時もあるし、人とかかわって達成感を感じる時もあるし、課題や人とかかわっている自分自身に達成感を味わうこともある。本当はどこに起因しているかというと、子どもたちが何かと向きあうことをかかわりとするならば、かかわりそのものには、課題、人、自分と三つに向き合うであろう。三つの「向き合う」がそれぞれ互いの関係を見ていくと六つぐらいに分けることができるだろう。そのかかわりを想定し、ねらいに即して授業を展開した時に、子どもが見せる姿を見ると何に意味を感じているかが分かってくる。分かってくると、その子についての取組が変わってくると思う。

重松

子どもたちの姿から学ぶ意欲を高めるとはいうが、その中身は個人によって違うものである。それが個人で高められない場合は、他者との関係、友達との関係や先生との関係などとかかわって最終的に意欲の高め方といったものを考えなくてはいけない。

できればそういったものを形にして、マニュアルとまで言わないが表にしたりして教職員間で共有していけばよいと思う。一つの手がかりとしていただければと思う。

フロアから（小学校）

２点質問したい。

青翔高校の報告では理数科に特化された取組があった。小学校では子どもの算数嫌いを感じることが多く、高校でも感じておられるかと思う。児童がどのようなところで悩んでいるのかというと、科学的な思考や算数的な思考を苦手にしていることが多い。そういった課題も出されていたかと思うが、小学校と高校との違いはあるかもしれないが。どういった形でかかわっておられるのか、後押しされているのかうかがいたい。

また、御所市の算数大会の話を聞いた。青翔高校では大学と連携されていることもあるが、小学校、中学校との連携がこれから生まれてくると思う。どのような取組を考えておられるのか。どのような連携ができていくのか教えてもらいたい。

青翔高校

数学と英語において少人数指導をしている。いまは、２クラスを三つの講座に分けて指導している。深みを多少変えながら達成感を味わわせる試みをしている。探究科学については、基本的に４人ぐらいのグループに分かれて、グループごとに全く異なったテーマで探究活動をしていく。理科の３人の教員がティームティーチングの形でかかわっていて、それぞれのグループとのコミュニケーションを図りながら進めている。ノートを介してアドバイスをしたりして取り組んでいる。

小・中学校との連携については、数年前から御所市内の小学校に理科の教員が招かれて生物のことやプラネタリウムの学習をしている。先ほどの報告にも一部あったが、科学の広場というものを毎年８月に行っている。高校に小学生から高校生までを招いて理科の授業や実験器具工作の手伝いをするなどの取組を行い、連携を図っている。

重松

青翔高校とは少し違うかもしれないが、全国的にあるＳＳＨ（スーパー・サイエンス・ハイスクール）でも小・中学校や幼稚園、保育園にも出かけているという。その際には先生ではなく生徒が行く。実際に実験するときに、実験で失敗したら大変だ、と自分でするときよりも慎重にしてみたり、いかに実験が楽しいものであるかと伝えるために工夫したりして、実は苦手であると思っていたが自分にもできるんだ、ということを自覚したという報告も得られている。

先生との連携だけではなく、例えば小学校なら幼稚園と連携をして、お兄さんお姉さんとしてやりながら、昨日まで知らなかった、できなかった自分に気がついて、もっと調べてみよう、もっと学習してみようという気持ちを起こさせる。そんな交流もよい成果を生むのではないかと思う。

フロアから（小学校）

学力のとらえが以前と違う、ということがあった。授業をしながら、児童は考えていないなと感じたら、これ以上授業をしても仕方がないと思う場面がある。学習意欲を喚起するときに授業が一番大切である、と考えており、「見通しをもって筋道をもって考えていく力を育てていこう」というテーマで校内研究授業を行っている。しかし学校の中でも教職員の中で学力のとらえが違うということがある。何とか一致しようということで研修も行っている。

昨年度、中学校の授業を参観する機会があったが、高校受験というものがあって、何とか小学校では筋道を立てて考えていく力を育てていこうとするが、小・中学校の間で学力の捉えが違うように感じた。小・中学校の間で学力のとらえをどのように一致させていけばよいのかうかがいたい。

重松

小・中学校の連携について、北中学校ではどのような取組をしているのかうかがいたい。

北中学校

体験入学をしたり、出前授業をしたりしている。きてくれるということでこちらもうれしいし、何よりも生徒が喜んでいる。普段見せない姿を見せてくれる。いろいろ準備する側としては苦労することもあるが、やってよかったと実感することがある。

平群西小学校

中学校との連携では出前授業で実際に小学校に来ていただいて６年生を中心に授業をしていただく。主に心構えということである。

ほかにもいろいろな先生同士の交流をしている。小学校の参観を中学校に知らせて中学校の先生にきていただいたり、その逆のことを行ったりして、小中の連携を行っている。

重松

棚橋先生、授業との関連ということで何かあればお願いしたい。

棚橋

まず、価値観の多様化については、今の国語の授業については、実は教員の言語能力を高めている授業が多いと思う。先生が一生懸命説明して、一生懸命サポートして、子どもではなく先生の言語能力が高まる。したがって、冗談のような話であるが、結婚式で先生の話を聞くと、長くて上手に話をされるということがあると思う。

子どもに言語能力を付けるという点から言うと、先生の言語活動より子どもの言語活動がたくさんあるようにしなくてはいけない、時間をとらなければいけないということになる。いま学びの共同体などでもはやっているがペアやグループでの活動を中心に授業を構成していくことが大事だと思っている。書くことを重視していくことも大事だと思っている。去年のフォーラムでもお話ししたが、フィンランドでは、授業でわざと学力差のある子でペアを組ませている。教える、教えられるという関係の中で教えるほうも学力を高める。そしてペアを基準として合体してグループとなって課題を解いていく。日本では先生が発問をしてそれに全体が一緒に考えて行くことをするため、それに乗れない子どもが生じてくる。しかし、細かい課題を子どもたちが徐々に解決していくという道筋を取っているので、見習うことは多いのではないかと思う。

学力と授業の形態という点から考えていくと、先生が活躍するのではなくて、子どもが活躍する授業というものに転換していくことを考えていかなければいけないということが言えると思う。

重松

子どもたちの学力差、あるいは意欲の違いを考えながらどのようにしてそれを小学校から中学校へつないでいくのかが基本的な課題であるので、発達ということも踏まえながら後ほどまとめていただければと思う。

フロアから（中学校）

小柳先生と棚橋先生にもう少しうかがいたい。

小柳先生には、学びの意欲の中に「理解できそうだ」「理解のしがいがありそうだ」という話があった。中学校で数学を教えていて学習が生活と離れていると感じている。この学びがどのように役に立つかを感じさせなければ達成感が難しいと思っている。この点についてもう少しうかがいたい。

棚橋先生には、自己をモニターする能力を育てるという話があった。自己をモニターする能力というのは、その前に相手をイメージすることから発すると思うが、その能力が子どもたちには身に付いていないように思う。その点についてももう少しお話しいただきたい。

小柳

理解し甲斐がありそうだということについては、今日の発表の中で示唆いただけることが多々あったと思う。例えば北中については子どもたちのかかわりについては「今だ」という言い方をしている。貴重な言い方だと思うが、子どもたちが悩んでいることについて、今できないのは、昔勉強しなかったからだろうと過去から縛ったりせず、また今勉強しないと高校に入れないよという言い方で未来から縛ったりするのでもない。悩んでいることに「今」答えることがよいと思う。ある程度指導は先の見通しが必要になってくると思う。

数学でいえば、かかわりとしては今なのだが、指導は先を見通して関連させることが必要である。単純に言えば、現在取り組んでいることが高校に行ったらどうなるのかとつなげていくことが大切だと思う。その点で、青翔高校では実際に小学校とつながっていて、実験の仕方を見せたりしているが、今学習していることが次にどうなるか、教科内では提示できるのではないかと思う。具体的に言うと、例えば小学校では分数の計算をするときに帯分数をしっかり教える。ところが中学校では仮分数のままであって帯分数に直すことはない。そこで切れ目が生じる。小学校で必ず直させられたことが中学校では無視されている。そのことを中学校でも言ってよいのかを悩んだまま授業が進んでいく。そのわだかまりを解決するためには、小学校の段階で中学校に行ったらどのように扱われるかを示すことだと思う。中高の関連で言うと、いま使われている数学が高校に行ったときにどう扱われるかを知らせることが大切だと思う。それが縦の教科での関連性、理解しがいがありそうということにつながりがあると思う。

もう一つの生活とのかかわりについても話し合われるとよいと思う。個人的な見解であるが、高校の時、微積分がさっぱり分からなかったが、大学に行って工学で実際にモノを設計をするときに積分の大切さがまざまざと分かった。積分があるからデザインができる、物の材質の厚みを計算するときに必要であるということが分かった。何に役立つかが分かった瞬間であった。

数学でいうと先にどうつながるのかという高校までの縦のつながりと、日常生活や日ごろ接していることとのかかわりについて関連付けることなのだと思う。

棚橋

先ほど「自己をモニターする」と言ったのだと思うが、つまり自己をモニターする意識のことである。言いたかったことは、一つはどう言ったら伝わりやすいのかということを、組織的に指導していくことがこれからは重要であるということ。「場当たり的」という表現をしたと思うが、例えば喧嘩をしたときに、その言葉をとらえて「いまこんなことを言ったから〇〇君はカッとなったたんだよね」という言い方で指導をしていると思う。それと同じように、国語の時間でもどういう言い方をすれば

伝わりやすいのかということをまず指導してもらいたいと思う。

それから、自分がどう見られているのかということをどう意識させるかということが質問の意図であったかと思うが、それには評価をもらうことが大事になってくると思う。教員が評価することも大事であるが、子どもたちが互いに話し方や書きぶりを評価していくことが必要である。交流ということが新しい学習指導要領では重視されているが、だれかの発表に対してこういう点がよかったとか、こういう点が改善すべきではないかということをやっていくことである。自分が人からどう見られているかということを自分で納得していくことが大事だと思う。

例えば大学生が、自分はある程度大きい声を出せると思って模擬授業をしていると、声が小さいという感想を得て、自分は声が大きいつもりだったけど小さいのだなと気付くことができる。

それから、これからは文学への偏重をやめて論理的な説明文の学習を主体に国語は進めていただきたいと思っている。藤原正彦さんは、相手の感情を汲むとかいうことに関連するのは物語を小さいときにいかにたくさん読んできているかにかかっていると主張されている。文学に浸っていく機会を与えていくことが重要になってくるのではないかと思う。

（フィンランドのビデオを視聴しながら説明）

教員は机間指導に回って分からないところを確認しながら指導をしている。

ワークブックを中心に授業をしている。ワークブックには提案しているようなことを書いてある。

その問題を解決しながら授業を進めている様子である。

北中学校

先程指摘された学力のとらえ方について答えていなかったので、答えていきたい。中学校では高校進学を控えている。そこで、北中学校では高校を中退しない、させない学力を身に付けさせると言うことが合言葉となっている。教科の力はもちろんであるが、社会にかかわる力、いわゆる人間力も付けていこうというわけである。

昨日卒業生がやってきた。その子は高校に行って中退をした後、いろいろ仕事をして資格も取ったのだが、もう一度高校を受け直すという。いろんな仕事をして本格的に仕事をしようと思うと高卒の資格がないと雇ってもらえないということである。

小・中・高等学校とあるが、その期間だけ全力を注いで指導していかなければならないが、そのあとも気軽に相談にのれる、参考になることを示せる学校でありたいと思う。

進路指導主任という立場になって初めて気付いたが、中退をしたり高校に行かなかったりして職を探すというのは、非常に厳しい状況になっている。小学校の先生方もそういうことが何年かのちに起こるかも分からないということを頭に入れながら連携をしていくことが必要ではないかと思う。高校とも連携をしていく必要があると思う。「状況が悪いのだがどうですか」、と問い合わせるような連携も必要である。以前は「高校をやめました」と連絡もあったが、学びのつながりとして必要であると思う。

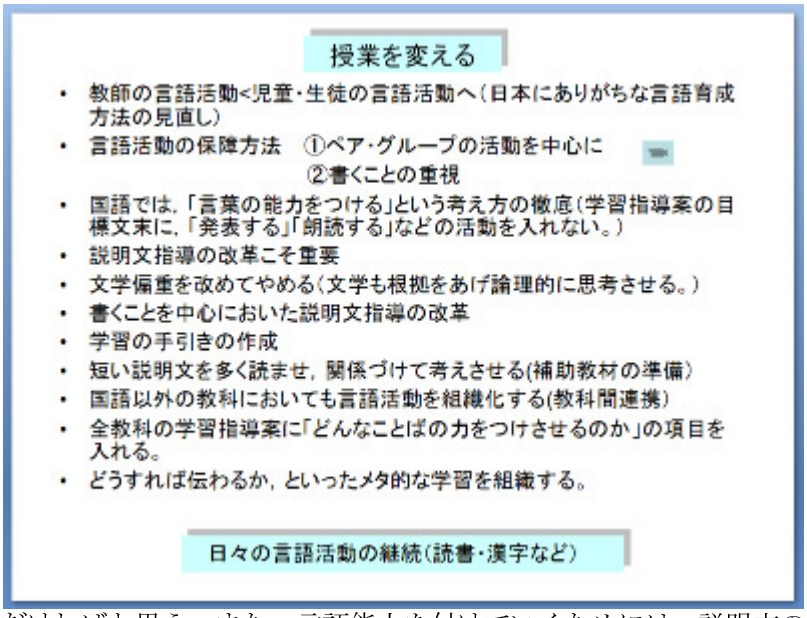
重松

今までのフロアとの交流も含めて、シンポジストから意見をうかがってまとめとしたいと思う。

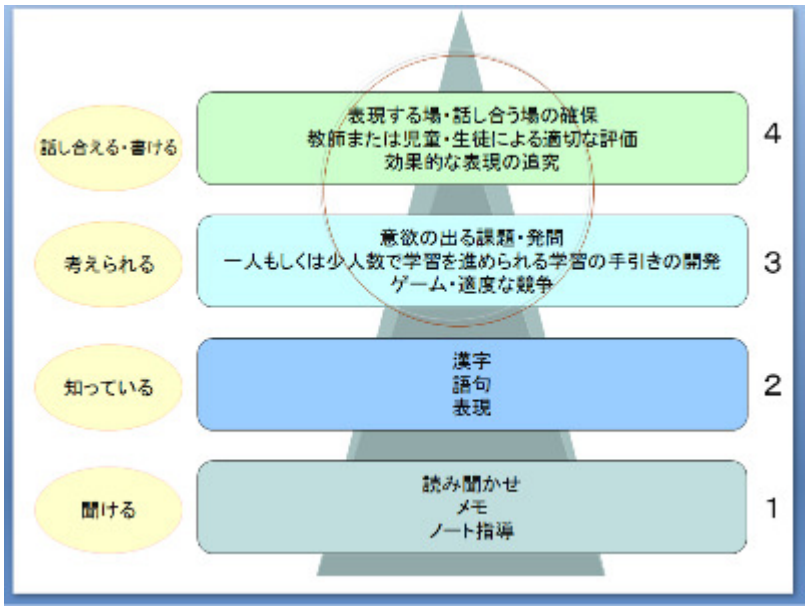
棚橋

スライドに基づいて説明をしてまとめとしたい。

国語については、どうも発表したり朗読したりして活動したらなんとなく授業が達成されたとか、ひとつの教材をしていて教材が分かれば授業が終わってしまったと思われているのではないかと危惧している。国語では言語能力を付けるという考え方を徹底させることが大切であって、公開授業をするときの学習指導案の文末は「発表する」「朗読する」などの活動にしないで「能力を付ける」「できるようになる」という文末にしていただければと思う。また、言語能力を付けていくためには、説明文の指導の改革こそが急務であると思っている。授業を見せていただくと文学の授業が多い。それを通して情緒や情操を身に付けていくということがあると思う。しかし、それは個人でもできることであってわざわざなぜ学校でしなくてはいけないのかと感じている。文学の場合、学校教育上では根拠を挙げて論理的な思考をさせる授業にシフトしていただければと思う。例えば、登場人物の心情を考える授業は往々にしてよくされる授業であり想像力を付けさせる上ではよいが、なぜ自分がそう読んだのか、文章の中から根拠を挙げて答えさせるとか、自分の経験とつなげるなど、論理的思考をさせることが大事だと思う。



さらに、書くことを取り入れることもそうであるが、学習の手引の作成をぜひやっていただきたいと思う。課題を与えて先生がサポートに入る、先生が擁護していく、そんなことができないだろうかと考えている。もう少し言うと、教科書会社では、どこも教科書にも学習の手引きをつくっていると思う。わたしが現場にいるときは、学習の手引を軽く見ていた。もっと別の自分の考えに合った授業をしたいと考えていた。しかし、学習の手引は学習指導要領を達成するために教科書会社で非常に検討し、こういう活動をすると能力がつくと想定しているものである。できれば、自分で手引を作る時間がなければあの手引を参考にして組み立てたらどのような授業になるのか、ということを考えたらよいと思う。



国語以外の教科においても言語活動の時間を意識化するということ、言語活動の充実は中教審の答申でもうたわれており、新しい学習指導要領にも書かれていることである。先生方も御自覚いただいていることだと思う。そこで、全教科の学習指導案の一部にどんな言葉の力を付

けさせるのかという観点を入れていただければと思う。

スライドを用意している。まず聞けるという層があって、最初は気付くということが大事で、知っている、考えるようになる、話し合えるようになるという。三つめの層と四つめの層に実は相関関係があるということが書かれている。学校の実態によってどの層にターゲットを置いて取り組むのか、ビジョンをもって取り組むことが大切かと思う。

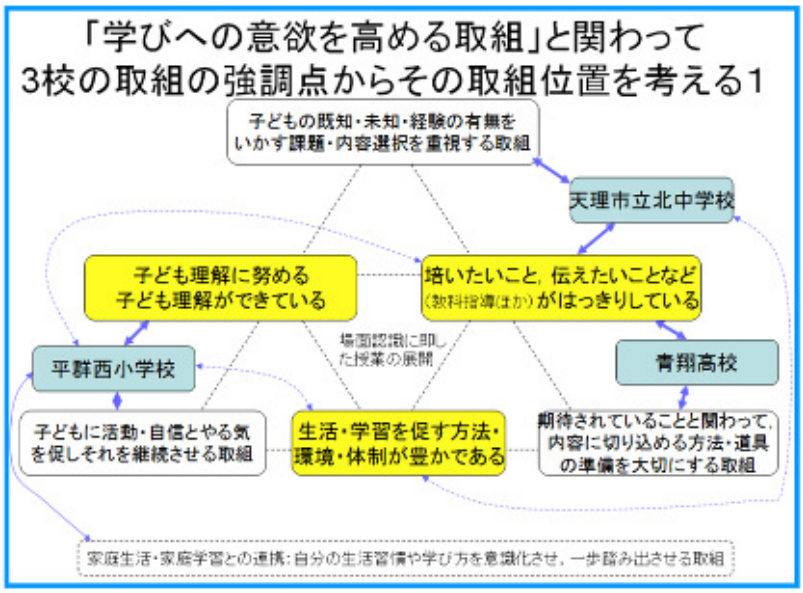
重松

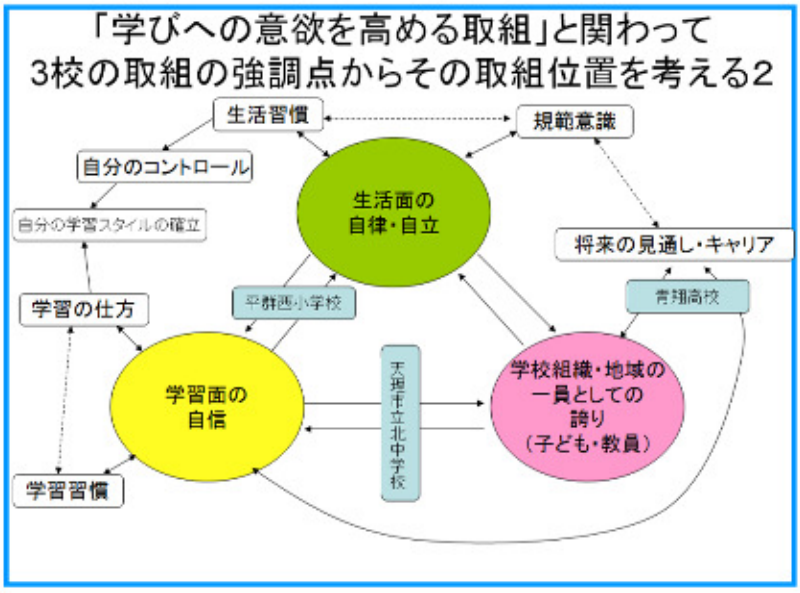
子どもだけの学びを考えているのではなくて、学校の抱えている課題を焦点化しているとして見ていただければと思う。

小柳

平群西小学校は生活面と学習面を行ったり来たりすることを大切にされていた取組だと思う。

生活習慣、学習習慣を克服していく中で学びの意欲を高めることに苦労されていたと思う。ある程度の力がついてくると、ルール化していくとか、こうしたらこうなるということが見えてくる。数年間はぐっと高まるのであるが、その後停滞してしまうことがある。その突破口は自分の学習スタイルの確立であると思う。それは学習の仕方に加えて自分のコントロールの仕方を教えるということである。勉強したくないときに、いかに自分を勉強にもっていくか、そういったすきま時間の活用などを教えてあげるなど、自分のコントロールの仕方を教えてあげると安定して自分をコントロールしながら勉強することが続けられると思う。さらに、児童が学校の組織の一員であるのだという誇りを育てることが次につながると思う。



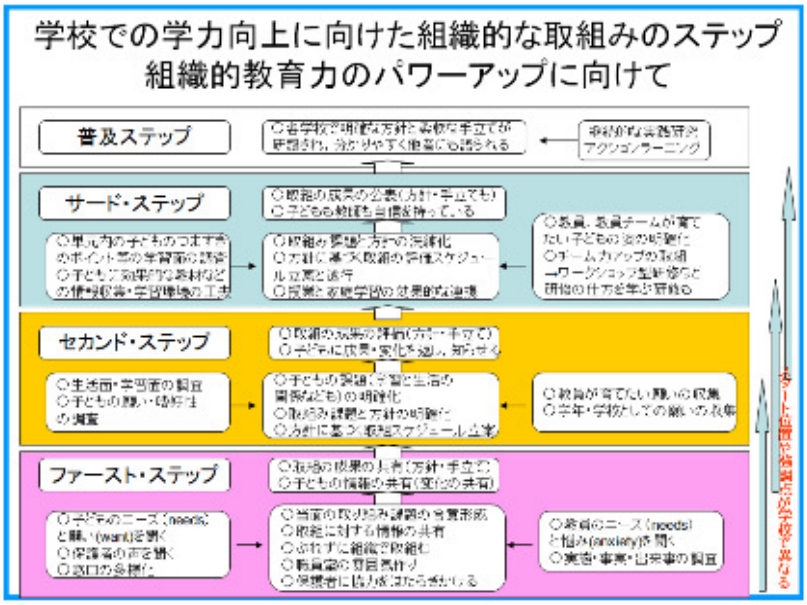


一方、北中学校は、学習面の自信と組織の一員としての誇りをつなげられたと思う。先生方の誇りと自信を先生方の取組からうかがえたし、生徒からも50周年の取組からうかがうことができた。学習の仕方についても、学び方をお知らせしておられるので、次なるステップは、将来

のキャリアになってくると思うので、自分の培ってきたことが将来にどうつなげていくか、ということが入ってくるとよりパワーアップしていくと思う。それを支えるのは平群西小学校ともつながるが、それを支える自分の学習スタイルを確立させていくことだと思う。

青翔高校は、かなり取組としては前に進まれていると思う。将来のキャリアともかかわるのであるが、生徒のアウトプットを残すことだと思う。研究そのものがファイリングされていて、先輩が何をしたかが一目で分かるとか、表彰状を飾ってあるとか、先輩が話をしに来るとか、そう言ったことが見えると次につながると思う。

最後に、学校によってそれぞれのステップがあると思っている。それぞれの学校の実情があると思うが、ファースト・ステップ、セカンド・ステップ、サード・ステップがあるとすると、学校組織でやっているときに自分の学校がどのステップにいるかということを把握して、次にどのステップを目指していくのかが分かっていけばよいと思う。



平群西小学校では子どものニーズや願いを聞いたりしておられた。今度は調査の結果を生かして次のステップにつなげることができると思う。北中学校においても次は何なのか、どのステップを目指すのかということが分かればよいと思う。

重松

なるほど基礎学力は一生懸命やって子どもたちに力は付いたが、そこから先がなかなか進まないという声を聞くことがある。そこで、こういった構造図を参考にして組織としてどうするのかということを考えていただきたいと思う。

では全体として、奈良県としてはどうサポートしていくのかということを含めて、県教委のお話をうかがいたい。

吉田

今聞かせていただいて、縦のつながり、教える方法、内容については、教育行政の仕事となるかなと思っている。

子どもの学力の差、わたしは知識の差だととらえているが、知識の差がいろいろある子どもたちについてそれに興味をもたせるためには、本質をきちんと教えるべきではないかと思う。

最近、小学校で「割合」がハードルになっていることを知った。「割合＝比べる量÷もとにする量」という公式で教えられているという。高校の教員でありながら恥ずかしい話、この公式すら知らなかった。ただ、中学校になると変化の割合という数学の用語ででてきたり、変化率という言葉に変わったり、高校では比率ということば、率という言葉に変わっていく。そういった中でこの公式が本質を突いているのかどうか、「６は３の何倍ですか」「３は６の何倍ですか」それが答えられれば割合は分

かっているのではないかと思う。「割合」という言葉が今後全く使われていない中で、教科書の中に提示されていくことをどのように教えていくのか。小学校ではすべての教科を教えていただくわけであるから、すべてにわたってその本質を熟知するのは難しいと思う。物の見方として小柳先生から微分積分という話があった。昔の人は地球は平らだと思っていた、それが微分の見方であって、地球は丸いというのが積分の見方であるという、そういったものの見方、本質というものを先生方に提供していく必要があると思う。

今年は、小学校教科等指導資料を学習指導要領の改訂に合わせて作成している。その際できる限り先生方の思いを盛り込めるような指導資料としていくよう指導主事はがんばっている。小学校の学級数配布するということで進めていきたい。従来より冊数を多くして、先生方一人一人に配布する努力をしている。

それから、ワークショップの話もしていただいたが、県としてもなかなか学校に来て話をしていただけない保護者に向けて奈良ファミリーに出向いて行ったり、３月７日にはライフ御所店において屋外で生活習慣の改善や学力の向上について話をしたりさせていただく。

それから、学校と家庭が協働してノーテレビデー、ノーゲームデーのような取組をしながら、生活習慣の改善や規範意識の向上、学力の向上に努めていきたいと考えている。

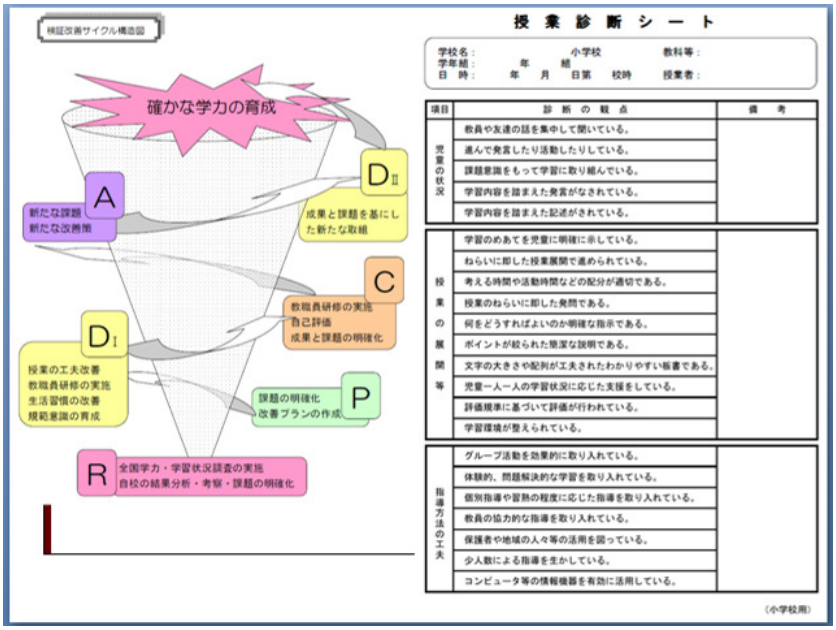
今日の御意見を参考にしながら取組を進めていきたいと思う。

重松

それぞれの最終的なコメントについてもっと聞きたいということがあるかと思うが、アンケートに記入していただければと思う。

ではまとめとしてお話させていただきたい。

つい先ごろ、今日の報告を含めて奈良県学校改善支援プランの追補版を発表させていただいた。県教委のＷＥＢページからダウンロードできるのでぜひ活用いただきたい。学力の育成、特に学ぶ意欲をどうするかということについて、ＰＤＣＡのプロセスを大切にしてしっかりと改善を図りたいとしている。特にしっかりと状況を判断すること、リサーチを大切にするＲをふくめたＲ－ＰＤＣＡというプロセスをお示しさせていただいている。



また、具体例が必要だという意見もあったが、授業改善を図るときにどんな点を大事にすればよいか、互いにチェックリストで相互に評価をしながら授業改善を進めていただきたいとして示している。校種別にそれぞれお示しさせていただいているので是非参考にしていただきたい。

何よりもなぜ学習意欲を高めなければいけないのか。特に最近のＯＥＣＤの報告（「Did you know?」

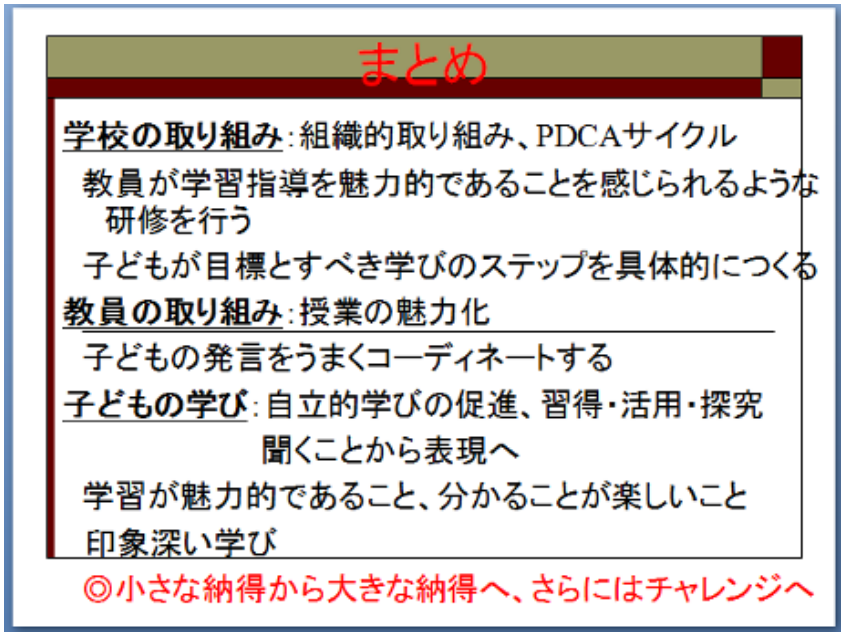
参照）にもあったが、結局21世紀の子どもの学力とは何だろうというと、一番大事なのは、子どもたちが大変で、全く知らなかった仕事、全く見たこともないような仕事に将来つかなければならないかもしれないということになるだろうか。その時に生きる力をどうやってつけるのか、いわゆる決まり決まったルーティングワークで果たしてよいのかということが問われていると思う。

さらには、わたしの子どものころにはコンピュータなどなかったが、まさに今、与えられた高度な技術に対して対応できるような力、そういったものに対してどのように興味・関心をもって取り組めるのか、そういった力をどのように付けているのか、型にはまった決まったものに対するものだけではなく、そういったものに対して興味・関心をもって先に進めるような力を奈良県としてはしっかりと付けていきたいと思う。

最終的に学校、先生方、子どもと分けてみていくと、基本的には学校では組織的に取り組むことが大切だと思う。よく言われることであるがなかなか難しい。北中学校ではしておられたが、教科を超えて授業研究を進めることは大変難しい。もっと詳しくお聞かせいただきたかったが、教科を超えて考えるときに、教科の中身ではなくて、子どもたちにどんなプリント、どんな板書を提供すれば共通に理解しやすいかといった議論で個々の教員の技術や授業の構成をテーマにすることも一つの方法だと思う。そしてＰＤＣＡ、Ｒ－ＰＤＣＡをしっかりとする。結果として、教員自身がもっと魅力的に感じられるような、そんなことを一緒に学校として取り組んでいただけたらと思う。

先程、小柳先生からもお話があったように、子どもが目標とすべき学びのステップ、あるいは学校の改善のステップをきちんと踏まえて、自分たちの学校での課題や子どもの課題を共通認識するとともに、次に何をすればよいか、プロセスやステップを意識した改善をしていく必要があると思う。これからは一つの色で、一つの方向性だけですむようにはならないと思う。

そして何より授業をいかに魅力化するか、「もっと聞かせてよ」「もっと授業を延長してもいいよ」という顔を子どもから見せてもらえるような授業をしていきたいと思う。



こういったことで特に子どもの発言、子どもの言語行動をうまくコーディネートしていくことが教員の力量だと思うので、そういうところで授業に対する教員の見識を高める必要がある。

最後に子ども自身で自立的な学び、21世紀の新しい社会に出会った時、自分が困ってもいかに解決していくか、そう言った力を実際に習得だけではなくて、活用していけるように、青翔高校でしているような探究的な学びのように、いかに自分で学びをつくっていくかというプロセスが大事ではないかと思う。したがって棚橋先生がおっしゃったように、聞くということでスタートして最後に自ら表現できるようなプロセスが何より大事ではないかと思う。

いろいろあるが、印象的な学びを残すことが大切ではないかと思う。印象深いものを残すことが大

切だと思う。

小さな納得を大事にして、小さな納得から大きな納得へ、そしてチャレンジができるようなそんな学びをつくっていく、そんな学びの心を熱くしていきたいと思う。

短い時間、学びの心を熱くしたいと思い、今後の方向性について話をしてきた。

このシンポジウムが十分そのお役に立てたかどうか分からない。

しかしそのためにはどうしていくのか、ということについては、先生方の「心」にご期待して終わりたいと思う。

ご清聴ありがとうございました。